

07年 佐賀インターハイへの道

佐賀インターハイへの選考会

関東大会は、山梨の小瀬競技場で開催された。

ちょうど12年前、私と鳥海(40回)が熊谷太郎を配する春高1600mRの応援に行った競技場である。為末選手の登場で国内の高校記録が大幅に更新された大会でもあった。スーパー中学生であった為末選手が高校では100mをあきらめ、スーパー400m選手へ変身した陸上史の変革の年でもあったのだ。

6月某日、我が家では

「子供の保護者会なんて行く暇はないなあ・・・」

そう言って、何年も父の日の会合を放棄して関東インターハイへ応援に行っていた私も、さすがに出席せねばならない状況になってしまった。2004年の熊谷、2005年の千葉、2006年の等々力と日曜日にマイルの予選や2000mの決勝を観てきたが、小瀬へは日帰りでは厳しい事も加味し4年ぶりに子供の保護者会に出席した。しかし今年から少しでもOBの現役への理解に役に立つよう、写真つきコラムにしているのであわせてご覧頂きたい。17~18歳そこそこの後輩たちはさまざまな環境に適応し、必死にがんばっている。

決死のウオークチャンピオン

春高陸上部はここ数年、連続して県大会入賞者を輩出している「競歩の中軸高校」になろうとしている。

前述したように先の県大会で、高島が堂々の埼玉制覇。全国ランクも9位と上場の発進をした。5000mWで22分16秒は北関東でもランクトップ。北関東4県の24人全員にマークされるプレッシャーを受けながら、高島は競技に臨むこととなった。

「監督～眠れないです・・・」

大会前日、計り知れない圧力に高島はすでに戦っていた。

高校生におけるインターハイという重圧。

野球でいう「甲子園」。

過去にも限りない数の高校生が、この重圧と戦ってきた。毎年、どの種目においてもそういったシーンを乗り越えるべく、高校生たちは苦戦してきた。

「じゃあ勉強して、試合の事を忘れてしまえばいいんだよ。
集中したらほかの事なんて気にしなくなってしまうらしいから。」

生真面目な高島への助言であったが、翌朝聞いてみると
「あんまり眠れなかった・・・」とぐったりしていたという。

しかし高島はそのおだやかな人格と異なって、試合では闘志をむき出しにしたレースを行った。

高島の歩形は、はね飛ぶような危険なフォームであると大塚さんはいう。
ウォーキングスタイルはベントニーとあって、膝を曲げて着地しても、キックしてもいけない困難なもの。先述した県大会でも幾人かの上位選手が、イエローカード三枚で失格している。

高島はトップグループを形成しながらも、歩形で注意をすでに二枚受けている。

危険だ！あと一枚で失格だ！！
監督は「3位でいいから！通過すればいいんだから！！無理するな！」
ペースアップはイエローを食らう危険が伴う。

しかし高島は燃えた。
目前の「関東チャンピオン」の座を逃したくない！

最後の直線で交わしてトップでゴール！
しかし安心はできない。
ゴールの後に失格の通告もあるのだ。

しばらくして三枚目のイエローが無いことを確認して、勝利を確信した。

「勝った！！」
まさに冷や汗ものの勝利であった。



これで高島は北関東の覇者として
インターハイ会場で紹介される事になるのだ。

南関東勢は最初からランキング上位に位置するので、各地区大会後の最終ラン
クはさして変わらないと思われる。
もっとも今シーズン、高島はトップでしかゴールしていない。
記録のみの比較よりより勝負強さが重視されると思う。

監督いわく「高島は歩形で失格しなければ、決勝もいけると思う」

インターハイの審判は厳しい。
数年前もトップでゴールした選手が失格を食らう大番狂わせが起きている。

前日の棒高跳びで弓削武蔵は残念ながら入賞を逃した。
自己記録を跳べば余裕の通過であったが、
そこはシビアなインターハイ予選。
みんながその当日にベストを出せるよう
何年も狙ってきているのだ。
残念だった。しかし、競技と同向き合うかが重要。
何もネガティブに考える必要はない。
引退しても堂々とOBとして胸を張ればよい。



競歩と同日の200mでは、春高が
3年連続インターハイ出場をかけたレースであったが
山崎は自己記録に届かなかった。

個人3種目、400mリレーでインターハイを狙った春高であったが、通過し
たのは1種目。それが通常の関東の厳しさなのである。
やはりインターハイへの道は今も昔も「狭き門」。

中長班合宿にて

県選手権中の6月23日、
夜間練習を行っているというので、
診療を終えた後春高に向かった。



真っ黒に日焼けした選手達が
ちょうど練習を開始する場面であった。

自らもロードレースを行う江森先生が引っ張るかたちで、15キロを延々走り込んだ。途中、腹痛で休み、回復を待って再開するものもいた。最後のほうは汗だくで息も乱れ、状態を揺さぶりながら食らいつく選手もいた。

かなり苦しいトレーニングである。故障者はスローペース90分ジョグでつないだ。練習量に比例する競技なので、走れないあせりも生まれるだろうが、それもスポーツの良い経験である。

そして、十数キロ走った直後に、レースに見合ったスピード練習をする。へとへとになった後だからこそ、試合でのラストスパートに生きてくる練習だった。当日は青山や丸山は熊谷で試合を終えたばかり。へとへとになっていたが、試合のなかった選手達も、早朝に15キロをこなしている。チーム内でも負けるわけにはいかない。

二年生には来期の関東や埼玉インターハイを狙える選手も育ってきた。当面は福田の持つ春高記録を塗り替えていくことが目標だ。決して届かない記録ではなくなってきた。

一年生も早々に3000mで9分台をマークし志が高い選手がそろっている。個人も駅伝も楽しみなチームになってきた。

みなたくましく成長している。

筆 撮 のもと歯科

